



読売俳壇

矢島 渚男 選

海峡に潮目幾筋鷹渡る

加須市 福田 啓一

【評】サシバや鷹の群が海を渡って南へ帰って行く。その海峡には幾筋かの潮目が見えるという大きな景観を立体的にとらえて見事である。この百舌鳥の管轄内に棲む私

京都市 足立 紀子

【評】モズは自分のテリトリーを守って生きる鳥。毎日そこを巡回して鋭い声で啼く。それを管轄内という自分流に言い換えたのが面白い。やっと出た尺八の音山眠る

上田市 香掛 俊子

【評】尺八はりコーダーなどと違って最初の音が出るまでに苦心する楽器だ。「やっと出た」が素直な感想だろう。静かに山が眠っている中という設定もいい。

舞ふ巫女の紅葉かざしつ那智の滝

岩出市 西岡さちよ

歯の抜けてはにかむ笑顔七五三

仙台市 本嶋 健

初雪といふ優しさを待ち望む

羽村市 竹田 元子

天高く飛行機で行くあなたの地

東京都 関根ともみ

安住の地のごと落葉吹き溜まる

葛城市 二上 三六

背丈ほど掘って自然薯見事なり

青梅市 津布久信雄

新松子小石がまた乗る鳥居

松山市 高山 洋子

宇多喜代子 選

秋晴や魚の影もくつきりと

京都府 山田 国雄

【評】「秋澄む」「水澄む」という言葉が思い出される。「影も」であるから、まず魚そのものがくつきりと見えるのだ。秋ならではの句。切る葱を飛び出す葱の白さかな

東大和市 板坂 寿一

【評】粗板のうえの新鮮な葱。包丁の刃を入れると白い葱が飛び出すように出てくる。「飛び出す」が生きて生きている。その匂いまでがあたりで漂う。

冬うららサッカー児童散らばつて

土浦市 山本 勝成

【評】はよりの少年サッカー。コートに広く散らばり、各々の位置につく。冬日があたたかく児童らにふりそそぐ。

日曜の青空市場温き冬

埼玉県 竹本 遊児

里神楽祖父のあぐらの一夜かな

津市 中山 道春

記録札付け放す鳥冬の雲

海老名市 山田 山人

一心にもの食う猫背文化の日

蔵市 深谷 紀夫

明日も又積もるであらう落葉掃く

奈良県 池田美砂子

立冬の日射しを弾く散歩かな

秋田市 岡部いさむ

プリンター音の乾きも今朝の冬

和歌山市 針谷 国光

正木ゆう子 選

パレードの名残の銀糸冬に入る

東京都 本多 明子

【評】何のパレードだろう。衣装から落ちたのか、銀の糸が道に。銀色からは他の華やかな色彩も思われ、楽隊の音まで残っているそう。並木も初冬らしく色づいているか。本当にしるるる時雨忌となれり

宝塚市 広田 祝世

【評】芭蕉の忌日「時雨忌」は陰曆十月十二日。陽曆では十一月の時雨の多い頃である。享年は五十歳。今ならば、早すぎるという年齢だ。大根焚「さむおすなあ」と行列へ

枚方市 定井 節子

【評】大根焚とは、煮た大根をふるまう京都の寺の行事。大根が美味しい季節になった。輪切りに皮を剥き面取して、煮る時間も幸せな大根。寒いねともう一振りの唐辛子

周南市 原田 英夫

退院の夫の腕ぐまで置く蜜柑

東京都 松永 京子

山道を登れば滑る朴落葉

川越市 大野宥之介

木枯しの行方は知らず大都会

越谷市 安居院半樹

小春日や歌ひ出しそな古墳群

宮崎市 藤田 長汀

熊の分少し残して山下の

松戸市 倉林 高次

分け入れば暖かさうな枯野かな

東京都 中島 徒雁

小澤 實 選

風邪ひきかけのぞわぞわをねじ伏せる

高岡市 池田 典恵

【評】風邪のひきはじめの悪寒をなんとかおさえこんだ。熱燗で風邪薬を流し込んで、さっと早寝をしてというところだろう。うまくおさえこんで、仕事に支障はなさそうだ。小春日は饅頭日和温泉街

習志野市 本庄 昭郎

【評】小春日に温泉街を訪ねると、ところどころで温泉饅頭をふかす湯気が上がっている。小春日に重ねての造語「饅頭日和」が、効果的だ。父と子のタイヤ交換小春空

江別市 北沢多喜雄

【評】父と子とが力をあわせて、冬用タイヤに交換している。この小春がどんなに貴重か。江別市という地名もスパイスとしてはたらいっている。銃声が二発弾犬突進す

倉敷市 中路 修平

クレヨンの家族の顔や冬うらら

湖南市 滝井 正之

漱石の口髭豊か冬ぬくし

甲府市 村田 一広

横綱の張り手のやうに冬来たり

川口市 高橋まさお

葱ひきてせわしく埋ける日暮かな

日立市 菊池三三夫

凧や屋台の椅子の引けは鳴る

横浜市 岡 一夏

ぐずる子を肩車して西の市

東京都 岩崎 美範